

—あおぞら—

「大気環境未来60」募金について

公益社団法人大気環境学会 副会長
近藤 明

大気環境学会は2019年12月に創立60周年を迎えます。これを記念して、2018年4月より「大気環境未来60」募金を始めました。目標金額は1,000万円とし、以下の目的で運用いたします。

- ①小中高生を対象とした大気環境に関する啓蒙活動
- ②大気環境に関する研究に従事する若手研究者の育成
- ③大気環境に関する国際交流(特に日中韓交流)の支援

次の世代を担う子供達に、安全で快適な大気環境を引き継ぎ、世界中で大気環境の明るい未来を実現するために、皆さまからの温かい支援・募金をお願いいたします。

大気環境学会は、1959年12月に設立された大気汚染研究協議会から数えると、2019年12月に60年を迎えることになります。この60年間にわたって大気環境学会は、日本の大気環境研究を牽引し、産官学連携の取り組みによって深刻であった日本の大気汚染問題を解決してまいりました。しかしながら、社会的関心事が高い対流圏オゾン、微小粒子状物質、水銀、温室効果ガスなど、国際的に協力して取り組むべき大気環境問題はまだまだ多く存在しています。60年は干支が一回りして再び生まれた年の干支にかえることから、還暦と言われ、鎌倉時代から長寿のお祝いが行われていました。大気環境学会も創立60周年を祝うとともに、また新たな1年を刻んでいくことを目的に、「大気環境未来60」募金を2018年4月より始めることと致しました。募金の目標金額は1,000万円とし、各年100万円を10年間運用する予定です。募金は、以下の目的に運用いたします。

①小中高生を対象とした大気環境に関する啓蒙活動

大気は水と同様で、我々にとって最も身近な環境メディアであり、呼吸によって大気中の酸素を取り込まないと我々は生命を維持していくことができません。大気が汚染されると、呼吸によって微量有害化学物質が体内に取り込まれ、我々の健康は害されます。世界保健機関は2018年5月2日に、微小粒子状物質などによる大気汚染が世界的に拡大を続けており、肺がんや呼吸器疾患などで年間約700万人が死亡し、世界人口の約90%が汚染された大気の下で暮らし、健康被害のリスクがあると、特に汚染が深刻なのはアジア・アフリカを中心にした低・中所得国で、大気汚染による死者の90%以上を占め、欧州や北米、日本などの高所得国では大気汚染の深刻さは少ないと発表しています。日本の小中高生は、きれいになった大気のもとで育ち、アジア・アフリカの大気に接する機会もほとんどないので、大気汚染そのものを知りませんし、生活体験もありません。必然的に、大気環境に関心を持つこともなくなるので、大学で大気環境を学

び、大気環境学会で活躍する人材に育つこともありません。若手学会員の減少は、どこの学会でも問題となっていますが、大気環境学会は、顕著に若手学会員の減少が出ているのではないかと感じています。まだ遅くはないので、この募金を、小中高生を対象とした大気環境に関する啓蒙活動に運用し、次の世代を育てたいと考えています。

②大気環境に関する研究に従事する若手研究者の育成

設立時の名称である大気汚染研究協議会からも明らかのように、大気環境学会の使命は、1967年に定められた公害対策基本法を基に大気環境基準が設定された二酸化硫黄、二酸化窒素、一酸化炭素、光化学オキシダント、浮遊粒子状物質の大気中濃度を削減させるための測定手法に関する研究、発生源対策に関する研究、メカニズムに関する研究など明確でした。その成果により、光化学オキシダントを除くと大気汚染物質濃度は着実に減少し、日本の大気は、ほぼ大気環境基準を満足するようになりました。皮肉なことですが、大気が清浄になると、大気環境学会は研究の足場を失っていくこととなります。2011年にPM_{2.5}(微小粒子状物質)がマスコミにセンセーショナルに取り上げられた後、大気環境学会の研究は、PM_{2.5}に関する研究へと大きくシフトしていきました。ここ数年PM_{2.5}濃度は減少傾向にあり、PM_{2.5}に関する研究も従来の大気汚染研究と同じ運命をたどるのではと考えています。次の60年を見据えて、大気環境学会の柱となるような研究テーマを探することは大気環境学会の喫緊の課題です。この募金を若手研究者育成助成のために運用し、大気環境学会の柱となる研究にチャレンジして頂くことは、大気環境学会の末永い継続にとって必要です。

③大気環境に関する国際交流(特に日中韓交流)の支援

研究活動の国際化は言われて久しいですが、大気環境学会も国際化を志向しなければ発展はありません。大気環境学会は、韓国、中国と共同で国際雑誌Asian Journal of Atmospheric Environmentを刊行しています。また、大気環境学会年會に韓国と中国の代表者を招待し、また、韓国と中国での学会年會に大気環境学会員が招待されるなど、良好な相互関係をすでに構築しています。この日中韓の関係をさらに強固にし、東南アジアへと広げ、大気環境学会が今までに築いてきた知識・技術の世界展開は、大切な国際貢献となります。そのためにも、この募金を大気環境に関する国際交流、特に日中韓交流のために運用したいと考えています。

「大気環境未来60」募金運用の夢を語ってきましたが、募金が集まらないと夢に終わってしまいます。この拙文を一読して頂いた皆様方からの温かい募金をお願いいたします。